

モームの宗教観

(W. Somerset Maugham's Religious
Views reflected in his Works)

小金丸政雄

序

モームの短編“Rain”（雨）の中には宣教師に対する容赦ない無慈悲な批判、描写があり、これに対しては宗教家の反感、あるいは非難があることは想像されるが、fiction（創作）の中にあられる人物や事件は必ずしも現実と一致するものでないことは、読者があらかじめ了解しておくべきではなからうか。モームの長編小説“Of Human Bondage”の中にもモームの人生観、宗教観とも考えられることが、その主人公 Philip Carey の思想として述べてあり、これは明らかにモームその人の思想動向と見られるが、これをそのままうけとることは、いささか躊躇される。モームの宗教観については、彼の随筆“The Summing Up” Chapter 69 以下に、ほとんどその全貌が明らかに述べてあるが、それは終始懐疑的である。彼の他の作品にも、諸所に、宗教に対する模索的な考え方の一端がうかがわれる。例えば“The Painted Veil”の中に、また、Cosmopolitans（短編集）の中の一編“The Judgment Seat”（裁きの座）の中に、あるいは The Razor's Edge（剃刀の刀）、Catalina（カタリーナ）などの中に見られる。

筆者は以上の作品、彼の晩年の日常生活、あるいは彼の周辺の事情などを参照しつつ、彼が人生、特に宗教について果して如何に考え、如何に悩んだか、その実相を探求してモーム研究の一助としたい。以下モームの作品のいくつかをとりあげて宗教的見地から若干の考察を加えることにする。

短編“Rain”について

“Rain”の中の宣教師 Mr. Davidson に対する容赦ない、むしろ苛酷な批判描写が宗教家の反感をひきおこすことは一応考えられるが、そもそもこの作品はモー

ムが南洋旅行中偶然出会った宣教師と、素性の知れぬ、いかがわしい女とを結びつけて、このような situation に起るかも知れない事件を想像して作り上げた全く事実に根拠のない fiction に過ぎないのである。(A Writer's Notebook 中1916年の記事参照)、モームの考えでは、ただ読者に物語を面白く読ませればよいのであって、特に宗教家を攻撃する意図で書いたものではない。しかし、この作品の中で、モームの代弁者と考えられる Dr. Macphail は、宣教師 Mr. Davidson 夫妻が、船内の喫煙室でトランプに興じ酒を飲んだり、ダンスをしたりしている連中を軽べつの眼で見ながらお高くとまっているのをひやかして、“The founder of their religion wasn't so exclusive,” (だが、あの人達の御先祖は決してそんなに排他的な取扱いはなさらなかったはずだがねえ)と、自分の妻に云って、キリスト教の宗祖 Jesus Christ の真意を汲まぬ宣教師の自己本位の言動のひらめきを批判している。これは暗に一方で Jesus Christ その人、およびその教えを高く評価すると共にこれを誤って解釈する伝道者をからかっているのではなからうか。モームの宣教師に対する反感は幼時自分の面倒を見てくれた伯父にあたる牧師 Henry Macdonald Maugham の利己主義、表裏のある生活、偽善的態度などを見て、つちかわれたものといわれているが、もしモームが両親と早く死別しないで他の環境の下に育っていたら恐らく彼の宗教観、あるいは聖職者に対する態度は違っていたのではなからうかと推測される。幼少の頃両親を失い、その上、吃音^{どもり}であり、子供に理解のない伯父夫婦に育てられ無理に宗教的教義を押しつけられたことが、彼の素直な気持を失わせ、宗教不信あるいは宗教懐疑に追いこんだのではなからうか。しかし彼の心の底には意識的あるいは半ば無意識的に宗教的感情の起伏がうかがわれるふしがある。

“Rain”の中には伝道に従事する宣教師の決死的な勇敢な行為、熱狂的な伝道精神に感歎の声を発する箇所もある。これに対してモームを代弁すると思われる Dr. Macphail 自身は臆病で小心、終始傍観的に描写されている。宣教師 Mr. Davidson が、いかがわしい女性 Miss Thompson の説得に懸命に努力しながらも遂に彼女の誘惑に負けて自責の念に駆られ自殺するところは、余りにも痛ましく人間の弱点、矛盾性をついている。モームは The Summing Up Chapter 17 の初めの部分に、“I think what has chiefly struck me in human beings is their lack of consistency.” (人間の持っているもので、私を特に驚かせるものは彼らが矛盾だらけであるということだと思う。)と云っている。これはモームが作品に好んで用

いるテーマである。

“Of Human Bondage” について

“Of Human Bondage” (人間の絆) は Philip Carey の幼年時代から30才にいたるまでの物語である。彼の母の死去— (父はすでに死亡している) —それから蝦足 (club-foot) で、はにかみ屋の小さい少年である彼が Blackstable の伯父に引きとられるところから始まる。Philip は紳士の子弟の行く学校にやられて、そこで教育をうける。彼は伯父が彼のためにもくろんだ聖職に就くことに反対して、パリで絵の修業をするが、遂に自分に才能がないことを発見する。それから貧困と闘い、あるいは、ろくでなしの、あばずれ女とかかりあったりして、苦しい破目に陥るが漸く理性をとりもどし医師として立ち直り、自分よりもずっと若い平凡な女性と結婚して平穩な生活に入るという筋である。

この小説はモームの自伝的小説ともいわれるもので、主人公 Philip Carey はモーム自身にほかならぬと考えてよいのであるがモームが “Of Human Bondage” の “Foreword”(1915年) において “Of Human Bondage is not autobiography, but autobiographical novel; fact and fiction are inextricably mingled:…” と云っているように、事実と創作が切り離せないようにまじり合っている。従って Philip Carey の信仰喪失の過程に関するエピソードもそのままモームの考えとしてうけとってよいかどうか一応検討を要するのではなからうか。ただし “The Summing Up” Chapter 65 では、ほぼこの通りの話が語られている。

“Of Human Bondage” Chapter 14 の中に、「信仰は山をも動かす」 (Faith will move the mountain.) ということ、聖書で読んで、どうぞ私の跛を直して下さいと幾晩か Philip が熱心に神に祈る、そして満願の朝、ついに祈りが聞き入れられなかったことを知って、ここに宗教への最初の疑問が生まれるという話があるが、このような極めて単純な動機で宗教不信になることも、fiction (創作) として、つくりあげた話なら、一応うなずけるが、宗教不信の深い根拠とはなり得ないのではなからうか。モームが、このようなことを小説の中にとりあげたのは、幼時彼を引きとってくれた牧師の伯父夫妻のケチで嘘の多い生活に対する彼自身の反感も大いに手伝ったものと考えられる。

モーム自身が幼時両親を失ったこと、特に母親の愛情に飢えていたこと、子供に理解のない伯父夫婦に育てられて孤独だったこと、吃りのため、恐らく学校では学友達から散々なぶりものにされたり先生たちから十分かばってもらえなかったことなどが、彼を次第にひねくれた、素直に物を考えない、皮肉屋にしてしまったことは想像に難くない。本来心の底に宗教的な感情を潜在的に持っていたながら、ことさらに、これを反発して行った気配が彼の作品のいくつかに感じられる。

モームは彼の人生観とも見られることを、Philip Carey に次のように云わせている。 (“Of Human Bondage” Chapter 106 後半参照)

There was no meaning in life, and man by living served no end. It was immaterial whether he was born or not born, whether he lived or ceased to live. Life was insignificant and death without consequence. Philip exulted, as he had exulted in his boyhood when the weight of belief in God was lifted from his shoulders: it seemed to him that the last burden of responsibility was taken from him; and for the first time he was utterly free. His insignificance was turned to power, and he felt himself suddenly equal with the cruel fate which had seemed to persecute him; for, if life was meaningless, the world was robbed of its cruelty.

上記の the weight of belief in God (神への信仰という重荷) というのは、恐らく少年時代に牧師である伯父から無理におしつけられた信仰の重荷を指すものと思われるし、the last burden of responsibility (責任の最後の重荷)、the cruel fate which had seemed to persecute him (迫害されてばかりいるように思った冷酷な運命) などという語句は彼に内在する劣等感 (inferiority complex) をあらわすものではないか。彼が性来吃りであること、苦しい文筆生活を続けなければ生活して行けなかったこと、特に文筆の仕事に従事しながら十分文才に恵まれていると考えなかったこと、明らかに詩的才能の欠乏に悩んだことなど、彼の劣等感に拍車をかける原因が伏在しているように考えられる。このような劣等感は生活の重荷をひしひしと彼に感じさせたことは否めない。

さてモームは、「人生は無意味で死も何でもないとわかったとき、大喜びをした。丁度少年時代神への信仰の重荷がその肩から除かれた時心の底から喜びを感じたよう

に。」といているが、この解放感は仏教の解脱の心境に似ているが、仏教的な背景と深みに欠けている。そして彼の考え方には、ややもすれば、ただ直観的な結論を下すために、ことさらに論理を一足とびに飛躍させているきらいがある。

The Painted Veil について

The Painted Veil には、その heroine (女主人公) Kitty が、細菌学者であるその夫 Dr. Walter Fane と共に、コレラが猛烈に流行している中国の奥地 Mei-tan-fu (梅丹府) へ行き、そこでフランス人の修道女たちが孤児院を病院にあてて献身的に働いているのを見て、その信仰と生き方に大きな感動を受けるところがある。Kitty は次のように云う。

"I can't tell you how deeply moved I've been by all I've seen at the convent. They're wonderful, those nuns, they make me feel utterly worthless. They give up everything, their home, their country, love, children, freedom; and all the little things which I sometimes think must be harder still to give up, flowers and green fields, going for a walk on an autumn day, books and music, comfort, everything they give up, everything. And they do it so that they may devote themselves to a life of sacrifice and poverty, obedience, killing work and prayer. To all of them this world is really and truly a place of exile. Life is a cross which they willingly bear, but in their hearts all the time is the desire—oh, it's so much stronger than desire, it's a longing, an eager, passionate longing for the death which shall lead them to life everlasting." (Chapter LXVI)

しかし、もし永遠の生命がないとすればどうであろう？もし死が本当に萬物の終末であるならば生命とは何を意味するのか。修道女たちは何にもならないことに、すべてを捨てたのである。彼女たちはあざむかれたのである。いわば馬鹿であると疑惑を感じもする。(これは、実は、モーム自身の疑惑でもあったろう。)

これに対してモームの代弁者と考えられる Waddington は次のように云う。

"I wonder, I wonder if it matters that what they have aimed at is illusion. Their lives are in themselves beautiful. I have an idea that the

only thing which makes it possible to regard this world we live in without disgust is the beauty which now and then men create out of the chaos. The pictures they paint, the music they compose, the books they write, and the lives they lead. Of all these the richest in beauty is the beautiful life. That is the perfect work of art.”

これは明らかに美的生活の礼讃であり、善意の礼讃でもある。彼は神と人に対する奉仕の生活を送る The Mother Superior (修道院長) を没我的な崇高さの権化と見ている。崇高でやさしい修道女たち、コレラ患者の治療に当る Walter, その夫との間がうまく行かないで精神的に孤独な Kitty の行う善行は、とにかく清浄な、あたたかい美しさを、そこはかとなく感じさせる。

結局において The Painted Veil の中で、モームが登場人物に云わせていることは、人は我意に執着する限りその道は破滅に通じ、自我を捨てて神と人に奉仕することによってはじめて救われ、そこにこそ善意の美しさがあるというのではなからうか。

修道女たちの善行は神との関連において示され、Kitty の心の微妙なうつろいは修道院という特殊な雰囲気の中に、はぐくまれ、つちかわれて行って遂にその浄化にまで発展したのである。

短編 “The Judgment Seat” について

モームの短編集 *Cosmopolitans*, 1936 に収められている *The Judgment Seat* (裁きの座) という作品がある。John と Mary と Ruth という3人の人々が、死んで、今、神の裁きを待っている。彼らは30年間、永遠の生を望んで、悪と戦い、ようやく忍苦の旅を終ってここに来たところだ。彼らは義務を果たしたことを、嬉しくも意識している。神の法廷は混んでいる。地上では戦争が行われ、男のみならず女子供まで、悲惨な死をとげたものたちが、次から次に来ているのだ。この3人も戦争で死んだ。John と Mary の夫婦は魚雷のために死に、ルースは、愛する John が死んだので、すでに激務のため疲れはてていたからでは、そのショックに堪えず、彼らの後を追った。

彼らは神の前にひき出される。神は今不機嫌である。哲学者が 地上に行われてい

る不幸な出来事を思つて、こう神に云つたのだ。「誰も悪が事実上存在することを否定はできない。もし神が悪をふせぐことができないのなら、神は全能ではない。もし悪をふせぐことができるのに、それをしないなら、神は十善ではない。」このディレンマは神には解っている。しかしそれは神にもどうにもならないことだ。それだけなら神も笑つてすませる。しかし哲学者は、この前提から一足とびに結論を出した。「私は全能でも十善でもない神を信じる気はない」と。

神は次に待っているこの3人のものに向う。John と Mary は5年間幸福な結婚生活をした。そこに顔も魂も美しく清らかな Ruth が あらわれた。John と彼女とは Paolo と Francesca の如く情熱的に愛しあつた。しかし愛の最初の恍惚がすぎると、反省が忍びこんできた。彼らは節度のある人たちで自己と信念と社会を尊敬していた。無垢の少女をおとしいれてはならぬ。妻のある男と関係してはならぬ。そして、彼らの愛が妻に与える影響をみると、彼らは長い間の身を切る苦闘の後に、胸は破れても、最後の線を越えなかったことを誇りとして、ついに別れた。彼らは神に、いけにえを捧げる如く、幸福ののぞみも、生の喜びも、この世の美しさも、ことごとく捧げつくした。Ruth は神と徳行に身を捧げ、長い間にきつい頑固な女になった。John は妻に対する義務はあくまでつくしたが、不機嫌になり、生きることにあき、残っている情熱は、妻に対する執拗な憎悪だけだった。妻はかつては忠実な愛情深い女だったが、夫が自分のために払う犠牲に我慢ができず、だんだん辛辣になり生きているに堪えられなくなった。こうしてみんな望む死を得た。

神はこれらの陳述を聞いて顔を暗くする。“Go to Hell!” と神は云おうとするが、その場の空気にそぐわないのでやめる。彼がさしのぼる太陽をはてしないわだつみの上に輝かせ、雪を山嶺にきらめかせ、丘の間に小川をさざめかせ、黄金の麦穂を夕べのそよ風に波打たせたのは、一体何のためか? 「路傍のどぶの水に映るときこそ星の光は最もあざやかに輝くのだと思うこともあるのだが」と神は考える。しかし3人のものは、苦悩の後に義務を果したものの満足を感じながら立っている。神はふつと吹いた。かれらは消えた。神はかれらを無に帰せしめたのだ。

「わしはよく不思議に思うのだが、いったいどうして人間どもは、軌道を外れた性の関係 (sexual irregularity) (つまり不義の慾) を、わしがそんなに重要視していると考えるのだろうか? もしもわしの造つたものをもう少し注意して読みとつてくれたら、とくにこの種の人間的弱点には、いつもわしが同情をよせてきたということ

が、わかりそうなものだが—」(原文 I have often wondered why men think I attach so much importance to sexual irregularity. If they read my works more attentively they would see that I have always been sympathetic to that particular form of human frailty.) と神は云う。

それから神はまだ答を待っている哲学者に向って云う。「さあ、こんどこそは、わしが全能と十善とをなかなかみごとに結びつけたことを、おまえは認めないわけにはゆくまいな」(原文 You cannot but allow that on this occasion I have very happily combined my All-Power with my All-Goodness.)

この小説を読むと、モームの例の虚無的な、シニカルな考え方がまたちょっと顔を出しているようで、その真意はつかみにくいが、再読してみると、この物語にふくまれている思想は真善美の追求であり、神に対するモームの考え方を示すものとして注目に値する。

Catalina (カタリーナ) について

モームの神に対する疑問あるいは模索は、「カタリーナ」において信仰として示されている。この物語の筋をきつままで述べれば、こうである。

スペインのカステル・ロドリゲス (Castel Rodriguez) では、全市出身のふたりの著名な人物が到着するので、町中わきかえっていた。ひとりにはセゴビア (Segovia) の司教ラスコ・デ・バレーロ (Blasco de Valero)、もうひとりはその弟で有名な將軍のドン・マヌエル (Don Manuel) だった。

さて町中がバレーロ兄弟の歓迎にわき立っていた聖昇天日 (The Feast of the Assumption) に、ドニヤ・ベアトリス (Doña Beatriz) の尼僧院に付属する教会の聖母礼拝堂 (Lady Chapel of the church) で、ひとりの乙女がひざまずいて祈っていた。彼女はカタリーナ (Catalina) という名の16才の美しい娘だったが、かつて復活祭の闘牛に引かれて行く牡牛が狂いだしたとき、右足を強く踏まれて麻痺をおこし、一生の片輪になった不幸な子だった。祈りが終わって、ひとり泣きじゃくる彼女のもとに長い青い外套をまとった女があらわれ、いろいろと彼女の身の上をたずねたので、カタリーナは片足の自由を失ったことや、そのため恋人のディエゴ (Diego) から見すてられ悲しんでいることなどを素直に告げた。すると、その女は

「もっとも忠実に神に仕えているホワン・スワレス・デ・バレロ（Juan Suarez de Valero）の息子がお前を直す力を持っています」と告げてどこともなく姿を消した。

カタリーナは貧しい家に、母親のマリア・ペレス（Maria Pérez）と、叔父のドミンゴ・ペレス（Domingo Pérez）とともに住んでいた。そして、この叔父のドミンゴに聖母にあったことを話したが、彼はそのようなことをうっかり口出しすると、宗教裁判所のきびしい取り調べをうけるおそれがあるから、人に洩らさないようにと口どめしてしまった。

しかし、カタリーナのふしぎな体験は、彼女と母親の聴罪師（Confessor）を通じて、ブラスコ司教及びドニヤ・ベアトリス尼僧院長の耳にはいった。ホワン・スワレスの長男にあたるバレロ司教はそのことを一笑に付したが、尼僧院長は、自分の教会におこった出来事だけに大いに関心を抱き、司教に面会を求め、娘に会うことを強要し承諾させた。

翌日、司教は、聖母礼拝堂で娘に会い、直接はなしを聞いた。ところが、彼女は、とても、いかさま師どころか、誠実この上もない娘なので、彼はほんとうに奇跡がおこったのかと考えはじめた。司教は祭壇に近づき、聖母像に祈った。すると彼は静かに空中に昇って行って、像の顔と相対する高さで静止し、そこからまたゆっくりおりて来た。この奇跡は、カタリーナの口から、母親のマリア・ペレスを経てドニヤ・ベアトリスにまで伝えられた。尼僧院長はブラスコ司教がたしかに天の恩寵を得ていることを確信して、ついにカルメル教会でミサをおこない、司教に娘の足の治癒を試みさせることにしてしまった。

翌朝カルメル教会で尼僧院長ドニヤ・ベアトリス以下の尼僧たちが見守る中で、ブラスコ司教はミサをとえ、カタリーナの額に手をあてて、父と子と聖霊の名において足が治癒されんことを祈った。しかし結果はむざんな失敗に終わった。

打ちひしがれたブラスコのもとに、翌日、弟のマヌエルが姿をあらわした。彼は自分こそお告げで示されている人間だと考えている、と断言した。そして、自分の召使達が居酒屋でドミンゴ・ペレスと顔なじみになり、ドミンゴが司教の失敗を予見して警告するために修道院に行ったが、追い返されたことを聞いてきた、と伝えた。

マヌエルが去ってのち、司教は使いをやってドミンゴを呼びよせた。ドミンゴは神学的にきびしいブラスコ司教の考え方に対して、「神の属性は無限であるから、常識

「というものを神に認めないのはおかしい。」(原文 We know that the attributes of God are infinite and it has always seemed strange to me that men have never given Him credit for common sense.) と云って、神にもっともよく仕えてきたドン・ホワン・デ・バレーロの息子 (the son of Don Juan de Valero) とは、司教でも、マヌエルでもなく、彼らの弟であるパン屋のマルティン (Martin, the baker) であると述べた。

さて、聖堂でマヌエルの力がためされることになった。ドン・マヌエルは、カタリーナの頭に手をのせ、杖をすててじぶんの足で立てと命じたが、彼女は一歩進み出ると、もろくも床に倒れた。激昂した観衆は、 “A witch. A witch. The stake. The Stake. The Stake. Burn her.” (魔女だ、魔女だ。ひあぶり柱だ。焼き殺せ。) と叫んで聖壇に押しよせたが、厳然たる態度で両手を頭上高くかざしたブラスコ司教にさえぎられた。司教は、神の恩寵により娘の不具を治す力をさずかったドン・ホワン・バレーロの息子は、自分でもなく、弟のマヌエルでもなく、もう1人の弟(マルチン)であると述べた。はじめは罪深い誇りと虚栄心から自分とマヌエルがそうだと考えていたが、それは違っていると群衆に向けて釈明した。かくて、いやがるパン屋のマルチンが引き出され、なかば強制的に兄たちがしたことをくり返させられた。ところが奇蹟が起って、カタリーナは松葉杖をはずしても倒れず立つことができて、嬉しさの余り、すすり泣きながら母親の方へ階段を駆け下りて行った。群衆は歓声をあげ、町中の鐘が鳴りはじめた。というのである。

上記のように奇蹟を行ったのは司教のブラスコ・デ・バレーロでもなく、その弟の有名な將軍ドン・マヌエルでもなく、彼らの名もない弟マルチンであった。このマルチンについて、ドミンゴは司教に次のように云う。 “Your brother is a good and simple man. He has been a faithful husband to his wife and a loving father to his children. He has honoured his father and mother. He has fed them when they were hungry and tended them when they were sick, … Like our Father Adam he earned his bread by the sweat of his brow … He was a friend to all men, … Martin the baker has served Him better than you, …”

このようにマルチンは信心深く、父母のめんどうをよく見て世間の評判もよかった。ただ兄たちのように向上心がなく、身分の低い女と結婚し、パン屋となってしまったのである。また一方、この奇蹟の恵みを受けたカタリーナも心の美しい誠実な女であ

った。かくして神の恩寵は善意に満ち他人を愛し、自己の本務にいそしむ人々に授けられる。我意の偏執を去り、神の道を知り自然の生活を楽しみ、他を愛し、神に協力しこの世を幸福にする単純素朴な人々を神はよしとするのである。

むすびの言葉

以上モームの作品を通じて、その宗教観をうかがってみたが、短編“Rain”においては、モームは真実追求のあまり、宗教家に対する描写は、やや苛酷にすぎる感じがあり、長編“Of Human Bondage”においても主人公 Philip Carey が宗教不信におちいる道程を述べているが、The Painted Veil においては、修道院長の献身的な奉仕の生活を讃美し、このように美しい生活こそ、この世で一番美しいものであると脇役 Waddington に云わせている。また短編 The Judgment Seat では神の全能と十善との矛盾、調和の問題をとりあげ、Catalina においては人間の素朴な信仰と善行が神の恩恵をうけるよすがとなるというテーマを取扱っている。

これは真善美の追求が真にはじまり、やがて美と善に発展して行った経過とも考えることができよう。ちなみにモームの作品 Of Human Bondage は1915年(41才)短編 Rain をふくむ短編集 The Trembling of a Leaf は1921年(47才)、また The Painted Veil は1925年(51才)、The Judgment Seat は1934年(60才) Catalina は1948年(74才)に、それぞれ出版されている()内はモームの年齢)しかも Of Human Bondage から Catalina まで約30年の開きがある。この歳月の経過は、彼の精神の成熟発展を示すもので、上記作品にあらわれる宗教感覚の変化や推移は、彼の心的状況のうつろいを示すものであろう。即ち生硬、単純な物の考え方から漸次複雑微妙な考察に入り、やがて円熟の境地に入る過程を多かれ少なかれたどっているのではなからうか。

さて神の全能と十善の問題は前述の The Judgment Seat (裁きの座)の中で取扱われているが、The Razor's Edge (剃刀の刃)(1944年モーム70才のとき出版)の中でもこの問題に関連して「悪の問題」をさらに深く追求して主人公 Larry に、“If an all-good and all-powerful God created the world, why did He create evil?……”(もしも十善で万能の神さまが世界を創造したのなら、なぜ神さまは悪を創造したのであろうか?……)という疑問をなげかけさせ、「神は十善で

あるが必ずしも全能ではない。しかし彼が造ったのではない世界を何とかしてよくしようと努力し最後には成功するに相違ない」という趣旨のことを云わせている。またインドの仏教に非常な興味を持ち「魂の輪廻は、この世の悪に対する説明であると全時に弁明である」(Transmigration is at once an explanation and a justification of the evil of the world.) などと考える。70才の高齢でモームはわれわれの魂の救済はいずこに求めるべきかという問題に関心をよせ、それに正面からぶつかったようである。というのは *The Razor's Edge* の主題は「人間の救い」に至る道は、鋭い剃刃の刃を越えるように困難であるということの意味しているから、モームの意図もほぼ推察されるのである。*The Razor's Edge* の巻頭の引用文はこうである。

The sharp edge of a razor is difficult to pass over;
thus the wise say the path to Salvation is hard.

Katha—Upanishad

(鋭い剃刃の刃は越えることかたし。

救いに至る道もかくのごとし、と賢人はいう。)

カターウパニシャッド

以上の如く論述を進めてきたが、モームの作品にあらわれた前述の思想も、懷疑家モームはどこまでこれを肯定主張したのであろうか。単に登場人物の経験として創作的に描いたもので、モームの本来の思想とかけはなれたものとも考えられる。*The Summing Up*, Chapter 69 の終りの部分に述べているように、モームは不可知論者 (agnostic) であって、実証的に神の存在が説明できなければ神を信ずることができないという。彼のこの立場は容易に変ることはなからう。しかし彼がある種の神や真理を信ぜざるを得なかったことは、*The Summing Up*, Chapter 77 の終りの部分に述べてある次の言葉によって、うかがい知ることができる。即ち “It may be that my heart, having found rest nowhere, had some deep ancestral craving for God and immortality which my reason would have no truck with.” (どこに行っても休息を見ださぬわたしの心は、理性とはなんの関係もない神とか永生とかに対する、祖先からうけついで深い渴望を持っていたのかも知れぬ。) と云っているのを見れば彼が生涯を通じて真実と、美と、善と、また、ひそか

に靈魂と神を求めて模索と遍歴を続けたことは明らかである。

本稿を終るに当り、この言葉を書きそえて彼の作品鑑賞の指針としたい。

* * *

参 考 書 目

W. Somerset Maugham

Novels

Of Human Bondage

The Painted Veil

The Razor's Edge

Catalina

Short Stories

Rain (The Trembling of a Leaf)

The Judgment Seat (Cosmopolitans)

Essays

The Summing Up

A Writer's Notebook

中野 好夫編 モーム研究 (英宝社)

朱牟田夏雄編 サマセット・モーム (研究社)